

| 申請受付番号 | 1 | 2 | 3 | 4 |
|--------|--|---|--|---|
| 事業名 | 空き家を活用して命を守りつなぐ場づくり | 湖東地区発通勤通学バス | 総働で地域につなぐ移住者支援拠点づくり | 出会いと語りで孤立を超える 当事者同士のつながる拠点 |
| 団体名 | 一般社団法人TeamNorishiro | (任意団体) 湖東まちづくり会社 | NPO法人愛のまちエコ倶楽部 | (任意団体) あいとうふくしモール運営委員会 |
| 所在地 | 滋賀県東近江市 | 滋賀県東近江市 | 滋賀県東近江市 | 滋賀県東近江市 |
| 社会の課題 | 障がい福祉制度などに関係なく、引きこもりや障がいを持つ孤立状態にある人が、緊急時に駆け込める場がない。また「8050問題」の対応として両親の高齢化などによる家族の分離に備えて単身生活の経験など地域で暮らすための力を育む場がない。また彼らを支える親や障がい福祉を支える若手が集い学べるつながりの場がない。さらに、地域の障がい福祉以外の企業や学校など多職種で働く人に、障がい福祉のことを知ってもらう場がない。 | 湖東地区では、新規住宅供給が少なく旧来のコミュニティ内での建て替えも進まない。就労先が少ない。通勤・通学の不便さが要因となって人口減少が進んでいる。通勤・通学先に対応できる公共交通機関が不便なため、最寄り駅まで家族の送迎が必要となり、親の就労に制約が生じたり、引越を選択する家庭もある。若い世帯がない古くからの集落と新興住宅地の間に交流がなく社会構造の変化に対応できていない。そこで新たなコミュニティづくりのための仕掛けが必要となってきた。 | 移住・就農の行政支援は相談窓口はあるものの、地域と関係性を構築するための『つなぐ支援』が無い。移住後に集落と馴染めず出てしまったり、農業経営継承では両者の考えの相違から白紙に戻ってしまうミスマッチングや移住後の孤立が課題である。移住後の「生業」支援が無いことも定住の不安要素になっており、地域の担い手として活躍する機会が損なわれている。移住前から後まで「暮らす・働く」を支える体制づくりが求められる。 | ひきこもりが社会問題化して20年余りがたつ。支援機関は徐々に広がってきたが、本当に必要な支援が十分ではないという当事者からの意見もある。ひきこもりの者の中には、過去の経験から、人や社会への不信任、働くことへの不安・恐怖感もち、社会から孤立している者が少なくない。これらの悩みや苦しみをほぐしていく支援や環境こそが孤立を解決するうえで重要であるが、いまだ不十分である。 |
| 事業概要 | 年齢、経済条件、障がい福祉制度などに関係なく、引きこもりや障がいを持つ孤立状態にある人を対象に、暮らしをベースに彼らがアクセスしやすい工夫を凝らし、空き家を活用して緊急時に駆け込め、人によって意味合いが変わる命を守る場づくりを行う。通常時は「8050問題」の対応として両親の高齢化などによる家族の分離に備えて単身生活を体験できたり、薪の生産等の休憩や面談の場として屋内でのコミュニケーションの体験ができたりと、地域で暮らすための力を育む場とする。また彼らを支える親や障がい福祉の若手が集い学べるつながりの場とする。さらに、地域の障がい福祉以外の企業や学校など多職種で働く人に、我々の活動を通して障がい福祉のことを知ってもらい、引きこもりや障がいを持つ方への理解を促進して、地域の応援団になるきっかけづくりを行う。これらにより、働く場づくりから、空き家を活用して命を守り、人をつなぐ場づくりへと取組を拡張させ、彼らの命を守り、地域で働き暮らしていく力をオーダーメイドで育む。それと同時に、彼らの応援団を増やし、地域ののりしろ（許容・適応力）を大きくする。 | 綻び始めた社会の仕組みを繕うように地域活動をする中で、孤立するお母さんの様々な声が寄せられるようになった。朝夕の子どもの送迎に疲弊する住民と行政の間に入り、住民の声を行政に伝え改善を促したが、予算・担い手不足と、生活習慣が違う地域同士が市町合併したことからくる地域間のジレンマに悩む行政には解決できなかった。そのため、行政に託すだけではなく地域住民が動くことで何とかしたい、諦めたくないという気持ちを形にしていくことが重要と位置づけ動き出した。今回の事業は、社会的・家族内にも孤立している住民に寄り沿い、人と人をつなぎ、地域に根ざした暮らしができる仕組みづくりとして、住民が共助の形で運営する通勤時間帯に特化したバス運行を基幹事業として取り組む。バス運行により、子どもの学びと家族の就労の機会を広がり、社会的つながりの増大を目指す。また、大量・安価・高速に大都市への移動に便利なJR駅に接続することで、まちづくりの担い手である若年層の定住促進のきっかけとする。将来的に、昼間休車しているバスを利用した地域内の循環バスや子育て層が利用しやすい学童保育等を担える足がかりにしていく。 | 人口減少による地域の脆弱化の中、敢えて地方を選ぶ移住者は、次の時代の社会ビジョンを持つ貴重な人財である。しかし行政支援には移住者と地域をつなぐパイプが無いため、ミスマッチングや孤立が生まれている。このため本事業では、空き家等を活用した交流拠点を創り、移住者と地域、移住者同士をつなぐことで、移住者の「暮らす・働く」価値観を具現化し、地域の担い手として活躍できる支援体制を創る。 ・移住前に段階的に地域と関係性をつくれる交流型滞在拠点を創り、集落や住民、営農などと丁寧につなぐことで、ミスマッチングや孤立を予防する。 ・滞在中の地域交流や農業ボランティア・研修などのプログラムを提供し、移住予備軍の関係人口拡大も図る。 ・拠点を求心力にして多くのステークホルダーが移住者を支えるしくみを構築し、移住前から後まで多岐にわたる課題に対応する体制を創る。 ・地域資源を活用した生業創出の支援設備を整え、移住後の大きな課題「働く」をサポートする。 ・講座・ワークショップなどを通して、移住者同士が「こんな暮らし・働き方を創りたい」を語れる場を醸成し、共感や繋がりを生み出し、地域でそれを具現化する機会を創る。 | 主な取り組みは、①中間就労の場としてのおにぎり屋の実施、②孤立者同士が出会い交流できる場の実施、③孤立者同士が語り合える場の実施、④総働で孤立者同士をつなぐ取り組みの推進である。対人関係不安などが強く、相談窓口にはつながったものの就労支援に移行することが難しいひきこもり者が、日中に行ける場所として中間就労の取り組みをおこなう。「働く体験の場」であることが、働きたいと思いつながらも様々な理由から動けず孤立状態にある者の参加を効果的に促す。しかし、実際の参加を通じては、仕事に対する自信をつけるといった就労面だけでなく、スタッフや他の孤立者とのかわりによる安心感や受容感の形成、他者への信頼感の回復が期待できる。これをさらに促進するものとして、孤立者同士が集い、遊んだり話したりできる交流の場を実施し、生活にハリや楽しみを見出せる機会をつくる。また、そこでの関係性を土台に、孤立者が自らの体験や思いを語りあう場を実施することで、孤立感を打破していくことをめざす。以上の取り組みに、地域の関係機関が総働で孤立者をつないでいく仕組みを形成・推進することで、孤立者同士が出会い、つながり、支え合いながら孤立から脱していくことを支援する。 |